

崇仁・その祭り囃子・芸大を軸にした 楽器づくりとその手法に関する研究 ——地域のワザとの連携の未来をえがく——

竹内 有一、村井 陽平、小西 志保

はじめに

平成30(2018)年12月に、日本伝統音楽研究センターの竹内有一を研究代表者として、平成31(令和元、2019)年度京都市立芸術大学特別研究助成費を申請した。申請区分は「重点テーマア：異分野間の横断的な研究連携及び地域との連携に関わるテーマ」、研究課題名(研究テーマ)は「崇仁・その祭り囃子・芸大を軸にした楽器づくりとその手法に関する研究——地域のワザとの連携の未来をえがく——」である。審査の結果、助成を受けることになり、平成31(2019)年4月から令和2(2020)年3月まで、1年間の共同作業による研究活動を実施した。この報告は、その研究活動を振り返るものである。研究代表者の竹内が全体の執筆と編集、共同研究者の村井が研究内容の確認と校正、研究協力者の小西が作業データの執筆と全体の校正を担当した。

本研究は、本学がキャンパス移転を予定している京都市下京区の崇仁地域に伝承される祭り囃子に着目し、楽器づくりの観点から、地域の育んできたワザと大学との連携の未来をえがくことを目的とする。大学の新しい所在地となる崇仁地区の歴史と文化を踏まえ、そこに伝承される芸能を調査研究すること、それを地域の人々とともに進め、地域と大学の連携と交流を深めていくことは、近い将来、崇仁キャンパスにおいて教育研究にあたる本学教員、芸能の研究者にとって、当然の役目であると考えている。

以下、2020年3月31日に本学に提出した報告書を再構成して掲載する。

1 研究組織

(1) 研究代表者(所属・職名・氏名)

日本伝統音楽研究センター教授 竹内有一

(2) 共同研究者

美術学部デザイン科非常勤講師 村井陽平

(3) 研究協力者

京都文教大学名誉教授、崇仁教育連絡会顧問 竹口等

崇仁お囃子会 藤本節子

崇仁お囃子会 片岡実

崇仁教育連絡会副会長 榎村博純

三味線製造職人 野中智史

日本伝統音楽研究センター共同研究員 小西志保

2 研究の内容（目的、意義、特色など）

(1) 崇仁地域で伝承される祭り囃子の保存と活性化を、京都芸大のキャンパス移転という動線の中で捉えることを契機とし、地域に根ざしたワザ（技術、人材、文化）を生かした新たな楽器づくりとその手法を提案、推進することを目的とする。

(2) 日本音楽の研究者が、崇仁地域および他の領域との新たな連携を模索することにより、大学の移転先となる崇仁と大学との連携、相互の発展を長きにわたって活性化・多様化させる、その将来像を構想する意義がある。

(3) 特色

(ア) 笛の伝承者が笛を自作することに関する経験・知識・技術に基づいて、笛の製作とその手法の研究を進める。必要に応じ美術学部漆工専攻の関係者の助言も仰ぐ（地域と研究領域の横断的連携）。

(イ) 地域に根ざした産業とその根底にある技術と文化（ジーンズの商標革など）に着目し、将来、その特色を活用した崇仁ブランド+芸大デザインの新たな楽器（仮称：ネオ三味線）を生産するといった構想への展開を視野に入れる。

(ウ) 本研究にとどまらず、将来にわたった崇仁地域と大学との連携に役立てるために、崇仁と大学の提携事業を一覧するアーカイブ（web コンテンツ）作成の試案を検討する。連携事業の増加とともに、誰が何をしているか把握しにくいと地域関係者から指摘を受けているので、情報共有と事業同士の交流強化の一助としたい。大学ホームページへのコンテンツ掲載を大学広報委員会に働きかける。

3 研究の実施内容・方法

(1) 崇仁祭り囃子の調査と笛の製作手法の検討

崇仁お囃子会による定例の稽古、および本番（祭礼の巡行等）の機会を活用して、お囃子のサポートおよび伝承実態の調査、伝承者や笛製作者への聞き取り調査、笛製作の方法検討等を進めた。笛の試作にも着手し、試作した笛の調整と試奏を実際の稽古中に行った。また、将来に向けて、笛製作を生かした囃子伝承活性化および笛の量産化の方法について検討した。

以下に、日時・概要・場所・参加者を記す。研究代表者は、すべての項目に参加した。「◆」印において、研究成果の一部を公表した。

(2019年)

3月31日（日） 研究協力者とミーティング（場所：元崇仁小学校）

4月8日（月） 同上（場所：下京区 すぎうら）

4月中旬より 工具・材料の選定と調達（小型ボール盤、マルチルーター、ドライパドリル等）
〈協力：村井陽平（共同研究者）、片岡実（研究協力者）〉

4月10日（水） 崇仁祭り囃子の伝承調査・稽古参加、ミーティング（下京区 崇仁山鉦取蔵庫）

〈参加者：研究協力者、日本伝統音楽研究センター共同研究員、本学大学院日本音楽研究専攻生・美術学部3～4回生〉

4月17日（水） 同上

4月24日（水） 同上

5月1日（水） 同上

5月8日（水） 同上

5月12日(日) ◆崇仁船鉾・曳山の巡行参加、伝承調査、ミーティング(崇仁山鉾収蔵庫ほか)

〈参加者:研究協力者5名、日本伝統音楽研究センター共同研究員、本学大学院日本音楽研究専攻生・美術学部3~4回生〉

これまでに調査し習得した祭り囃子の演奏手法を、実際の巡行に参加し演奏することによって、研究成果の一部を公表した。院生が巡行をビデオ



カメラで録画し、研究資料として保存した。(写真1)

5月20日(月) 崇仁祭囃子の篠笛の材料調査、材料(女竹)の調達(向日市大塚竹材店)

〈協力:大矢一成(本学美術学部漆工専攻・准教授)、片岡実〉

竹材の調達については、西京区の竹林から所有者の協力によって調達する方法も検討したが、節が少なく乾燥させた良質の竹を竹林から採取するには手間と時間がかかるため、今回は上記の竹材店から調達した。(写真2)



5月下旬より 篠笛の製作手法の調査研究と試作 〈協力:片岡実〉

竹のほか、塩ビ管での製作も試みた(写真3)。数本の笛を試作し、穴の位置を少しずつ調整しながら、音程を整えた。竹は内径が均一ではないので、1本ずつ調整する必要がある、製作の難しさを改めて認識した。笛の製作については、成果を公表するところまで至らなかったが、7月以降の祭り囃子稽古や演奏においては、研究代表者は試作した笛を積極的に用いた。笛の試作については、次年度以降も継続して取り組み、本格的な楽器に仕上げたい。



(写真4:左から、塩ビ管の試作品、竹製の試作品、試作の手本とした崇仁お囃子会の笛。)



7月3日(水) 崇仁祭囃子の伝承調査・稽古参加・ミーティング(下京区 崇仁山鉦収蔵庫)
 (参加者: 研究協力者、日本伝統音楽研究センター共同研究員、本学大学院日本音楽研究専攻生・美術学部3~4回生)

7月7日(日) ◆崇仁祭り囃子と常磐津節のコラボレーション演奏の企画・実施 その1
 (七条大橋 絆コンサート、東山区 集西楽サカタニ)

(協力: 片岡実、榎村博純、小西志保(常磐津音花)、本学常磐津部有志)
 計画外であったが、七条大橋の維持活動に参加されている井上昭彦教授(美術学部)の紹介により、七条大橋 絆コンサートに参加する機会を得た。大学移転先に近い場所なので、崇仁祭り囃子と三味線音楽のコラボレーションの可能性を試みることにした。チーム音花というグループ名で、小西志保(常磐津音花)が構成をつとめ、崇仁お囃子会の参加協力を得た。地域と大学・学生の連携の新しい形を、研究成果として公表する機会になった。常磐津節の古典曲の演奏のほか、祭り囃子の伝統的な鉦・太鼓・笛の演奏にあわせて、三味線が笛の旋律を賑やかに演奏した。(写真5・6)



7月10日(水) 崇仁祭囃子の伝承調査・稽古参加・ミーティング(下京区 崇仁山鉦収蔵庫)

7月17日(水) 同上

7月24日(水) 同上

7月27日(土) ◆崇仁児童館主催 お囃子体験会 (協力: 崇仁お囃子会、藤本節子、榎村博純、小西志保)

崇仁教育連絡会の依頼を受け、下京区の小学生約20名に向けて、お囃子(鉦と太鼓)の体験会を実施した。将来の新たな担い手の獲得を目的とし、わかりやすい説明と体験の方法を心がけた。崇仁お囃子会の小学生約10名も参加し、演奏の模範を示した。(写真7)

7月31日(水) 崇仁祭囃子の伝承調査・稽古参加・ミーティング(下京区 崇仁山鉦収蔵庫)

8月4日(土) ◆崇仁祭り囃子と常磐津節のコラボレーション演奏の企画・実施 その2

登録有形文化財七条大橋ライトアップ点灯式(協力: 文化庁ほか、後援: 京都市ほか)において実施(下京区 七条大橋特設ライブ会場)。7月7日に実施したコラボレーションを再構成した。(写真8)



- 8月7日（水） 崇仁祭囃子の伝承調査・稽古参加・ミーティング（下京区 崇仁山鉾収蔵庫）
- 8月10日（土） ◆崇仁お囃子会の公開演奏への協力（楽市洛座夏祭り、元崇仁小学校体育館）、洛市洛座夏祭りの模擬店・盆踊り等への協力（元崇仁小学校校庭）
- 〈参加者：研究協力者、日本伝統音楽研究センター共同研究員、本学大学院日本音楽研究専攻生・美術学部3～4回生〉
- 崇仁お囃子会が7月中の稽古の成果を夏祭りで披露。稽古に参加した本研究チームの成果公表の機会ともなった。（写真9）



- 9月12日（木） 研究協力者とミーティング（下京区 崇仁新町）
- 10月26日（土） 同上
- 11月7日（木） 同上
- 12月7日（土） 崇仁児童館主催 餅つき交流会に参加（下京区 崇仁児童館）〈参加者：研究協力者〉
- 12月12日（木） 研究協力者とミーティング（下京区 崇仁新町）
- 12月14日（土） 同上
- 12月19日（木） ◆特別授業「崇仁祭り囃子の歴史と現況」の実施（ゲスト講師：片岡実）
- 〈参加者：本学音楽学部「音楽学特講」・音楽研究科「音楽学特殊研究」の受講者、研究協力者〉
- これまでに収集した研究資料（文献、映像、取材メモ等）を活用し、一連の研究成果を学生に向けて発信した。祭り囃子に長年関わってこられた伝承者による芸能にまつわるお話は、受講者の意識を引きつけた。5月の巡行に参加する受講者があらわれることを期待したい。

（2020年）

- 1月17日（金） 研究協力者とミーティング（崇仁自治連合会新年会、下京区 ホテルセントノーム京都）

（2）三味線胴面の革の特性調査と革張り手法の研究

地域の産業と人材、大学の特色を生かした楽器づくりのコンセプトを検討していくため、三味線という楽器の要である、胴面の革に着目した。革張りの作業を実際に試行することによって、その特性を調査した。

全4回の革張り実験を行ったが、いずれも三味線職人からの指導や直接的なアドバイスを受けずに、竹内・村井・小西が調査収集した情報を総合した独自の手法で行った。つまり、正統的な手法を用いて革張りの完成を目指すのではなく、調査で得られた断片的な情報をもとに実際に作業をしてみることで、それによって様々な問題に直面しながら、三味線の革の特性と革張り作業における大切な要件を、目の前にあぶり出すことを目標とした。そのため、研究協力者で三味線製造職人の野中智史氏には革張り作業への参加を要請しなかった。以下の記録は、あくまで研究の報告としてまとめるもので、革張りの手法を公開するためのものではない。本職ではありえないような無謀な方法・手順も含まれると思われるので、野中氏の名誉のために付記しておく。

以下に、日時・概要・場所等を記す。研究代表者・共同研究者・研究協力者数名が随時参加した。「◆」印にお

いて、研究成果の一部を公表した。

(2019年)

6月上旬より 三味線の胴面革の入手方法の検討、革張り手法の調査

6月24日(月) **革の種類・特性・加工に関する調査**

〈協力：中井紳一郎（(株)ミッドフィールド（右京区）、皮革製品加工業）〉

中井氏をゲストに迎え、同氏の工房で聞き取り調査を進めた。革を張った三味線胴を全員で観察し、三味線革の特性、三味線革の張り方の手法である「乾張り」「水張り」について意見交換を行った。

7月上旬 三味線の胴面革の入手。邦楽器小売業者の協力を得て、長唄三味線用の犬革について、表用・裏用、薄め・厚めを取り混ぜて、数枚ずつ購入した。

(写真10：購入した革を12月12日の公開授業で活用。革張りに使用する革を学生とともに選んだ。動物の皮を使用する楽器は、国内・国外に無数の種類があること、いずれも動物保護の観点から代替品が研究されていること、人間の衣食住に欠かせない動物の生命について考える必要があること、等について意見交換も行った。)



7月13日(土) **第1回革張り実験**

(本学常磐津部の部員も参加) (805研究室)

これまでに調査した知見に基づいて、共同研究者が所有する金属製の革張り機を使用して作業を進めた。以下に主な手順の概要と考察を記す。

◇革張り機の補修と調整 (写真11)

- ・垂直クランプ木片の破損箇所の修理。事前に村井が製作した木片を接着。
- ・締め付け用のバー、ボルト等の位置を微調整。
- ・村井の所有する革張り機を使用した。

◇革張り

- ・対象：竹内所蔵の三味線胴1個を使用。片面のみ胴革が破れたもの。
- ・方針：片面の胴革を張り替え、破れていない胴面は現状を維持する。

- (1) 革の裁断と表裏の確認：胴面の大きさ、革面の状態、革の折り返し部分を考慮し、適切な寸法の裁断目安を鉛筆で書き込み、目安に沿ってハサミで裁断する。革の裏面の胴と接着する部分に紙ヤスリをかけて滑らかにする(三味線職人の作業の一部を収録したビデオ資料による知見。接着力を増すための処置であると推定される)。革の表裏を

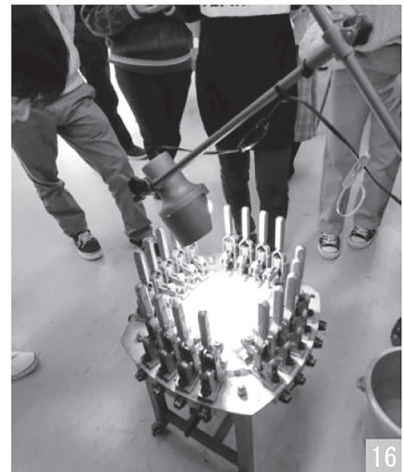


間違えないよう、裏面に鉛筆でマークをつける。

- (2) 胴面の清浄:破れた革を胴から剥がし、剥がした部分に固着している糊を湿らせて除去した。胴の周囲を紐で縛らずに片面のみ革を剥がしてしまったため、胴の表と裏の張力バランスが著しく変化し、胴板の接合面に次第に隙間ができてきた。至急、美術学部日本画専攻の学生に依頼し、日本画で使用する膠を調達、胴板の隙間に湯煎した膠を塗り込んで接着して、胴の周囲を紐で縛った。
- (3) 糊の作成:革を胴面に接着する糊は、一般的にはもち粉(餅米の粉末)を練って使うことを事前調査で把握していたが、試しに竹内研究室にあった市販のパック切り餅で代用することにした(身近な物品を積極的に研究に活用したいという研究代表者の意向)。切り餅を電子レンジで軟化させ、水を加えて固さを調整しながらよく練って粘度を強化させた。
- (4) 糊を胴に塗る:胴の淵の革を接着する面(約1センチ幅)に、作成した糊を塗った。(写真12:12月12日の実験より。音楽学部の学生が糊を担当。)
- (5) 革を湿らせる:事前調査を踏まえ、革を布で少しずつ湿らせておく「乾張り」を行う予定であったが、手順を間違えて先に糊を胴に塗ってしまったため、時間短縮のため急遽、革全体を水に浸して濡らす「水張り」を行うことにした。水を入れたバケツに革を浸し、表面の水気を布で拭き、革の湿り気を整えた。(写真13:7月13日、写真14:12月12日)



- (6) 糊の調整:胴に塗った糊が乾燥してきたため、水を塗って粘度を調整した。
※(1)から(6)まで約150分を要した。
- (7) 胴と革の固定:革張り機の台に胴を載せ、革をクランプで挟む。クランプの全レバーを順に倒し、革とクランプを密着させた。
(写真15:12月13日でおん連続講座において受講者にも体験してもらった。)



(8) 革張り：

台を上昇させて、革に張力を加えていった。どの程度の張力を与えたらよいのかわからなかったが、時々革を指で押さえたり、爪ではじいて音を出したりして、張力の度合いを見計らった。革が裂けることを危惧して、爪ではじいた時に緩めのフロアタムのような音色がする程度の張力までにとどめた。なお、革張り機の台は、水平ではなく、革を締める前には台がぐらつくような遊びがあった。※ (7) から (8) まで約 20 分を要した。

(9) 乾燥：張った革の上に白熱電球をかざして、革を乾燥させた（写真 16：12 月 12 日の実験より）。濡れた状態で引っ張られていた革は、乾いていくうちに収縮する特性があるので、次第に張力が増していった。革を爪ではじく音色も次第に高くなっていった。

(10) 胴の取り出し：約 90 分の乾燥の後、すべてのクランプレバーを順に上げて革をはずし、革を張った胴を台から取り出した。クランプを外している最中に、革と胴の接着面の一部が剥がれ、5センチほど皺が寄った状態になった。それでも全体の張力は保たれ、爪ではじく音は高かった。

(11) 張り具合の確認：胴を棹に差し、弦と駒を掛けて調弦した。駒が弦の強い張力によって革に沈みこんだ。接着面が一部剥がれたことによって、革の全体の張力が不足していることがわかった。試奏してみると、革が伸びた三味線のような、にぶく沈んだ音色であった。

(12) 考察：胴の取り出しの最中に、革と胴の接着面の一部が剥がれてしまうという失敗が生じた。剥がれてしまった要因として推定されるのは、糊の濃度が薄かったことと、糊付け面に古い糊が固着していたことである。糊の濃度については、糊の仕込みの段階では問題はなかったとみられるが、胴に糊を塗ったあと、手順の悪さで糊が少し乾いてしまったので、糊に水気を与えたことに起因するとみられる。古い糊の固着については、革が剥がれた部分を観察すると、胴の接着面に古い糊が残っていてわずかに凸凹していたので、革と胴の密着度と接着力が低下したのではないかとみられる。接着面の古い糊の清浄が十分でなかった。

7月14日（日） 第2回革張り実験（伝音センター 805 研究室）

第1回の実験で失敗した2つの要因の解消に留意し、おおむね第1回と同じ手順で行った。常岡亮氏（伝音センター共同研究員）も参加された。

今回は、辛うじて試奏が可能な状態に張り上げること



ができた(写真17)。接着、乾燥後に革の剥がれは生じなかったため、切り餅をリサイクル利用して作った糊の強度に問題はなかったことも証明された。しかし、次のような失敗と不満があった。革の張力が足りなかったため、試奏すると駒がやや沈み音色が良くないこと、革の裏側につけたマーキングを見忘れて、革面の表裏を逆にして張ってしまったことである。革が破けることを恐れずに、革の張力をさらに上げることを、次回の課題として確認した。

12月12日(木) ◆第3回革張り実験(伝音センター合同研究室2)

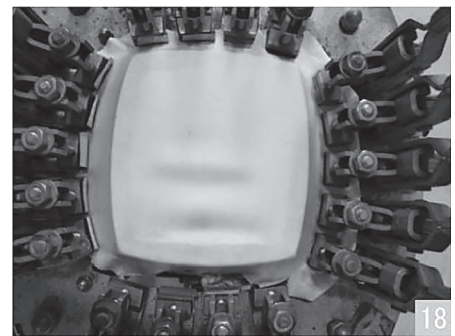
音楽学部「音楽学特講」・音楽研究科「音楽学特殊研究」の公開授業として行った。京都大学との授業交流のイベント開催中であったため、京大の教員と学生に参加を呼びかけ、大勢が集まるなか活発な質疑応答を交わしながら実施した。これまでの研究成果を学生に向けて公表する場となった。

前回までの手順を踏まえ、反省点に留意しながら、革の張力をさらに強めることに留意して革張りを進めた。その結果、実用できるような状態に張り上げることができた(写真:6(3)に掲載)。胴の端で革を折って側面を糊付けして仕上げる処置は、使用する工具と方法を検討中のため、先送りとした。

12月13日(金) ◆第4回革張り実験(伝音センター合同研究室2)

でんおん連続講座「常磐津節実践入門」の開講中に、同講座の受講者とともに実施した。これまでの研究成果を市民に向けて公表する場となった。

手順は前回と同様である。今回は、器具を締め付けて張力を強める最中で、クランプのストッパー(木片)が複数破損し、全体を張り上げる前に革の一方が緩んでしまうという失敗を生じた(写真18)。過去3回の作業で木片の疲労が進んでいたこと、使用した木片の材質に難があったこと、締め付けが強すぎたことが、その要因であると考えられる。



12月18日(水) ◆本学常磐津部主催ミニコンサート(大ギャラリー)における常磐津「紅売り」の演奏時に、第3回実験で張り上げた三味線を使用。使用者は、研究協力者の小西志保(常磐津音花)。約40名の観客の前で、研究の経緯の説明を交えながら(写真19)、実際の演奏によって研究成果の一部を公表した。研究代表者は公務のため欠席した。



12月19日(木) ◆同上(再演)

(2020年)

1月下旬

仕上げの工程に関する考察

革張り後に、革の端の部分をまっすぐに切り落とし、革の四方を折り曲げ、胴に糊付けして仕上げる工程は、専用の道具の調達と加工方法の調査が遅れていたため、実施を見送っていた。その後、竹内と村井の調査により、道具は市販の大工道具の毛引き、またはそれに類似した道具を使用することが判明した。そこで、市販の毛引きを購入して、実際に使えるかどうかを検証したが、三味線胴のカーブに沿って革を切り出すことは、刃の位置等の構造上の理由で、まっ

たうできなかった。今後は、市販の毛引きを大幅に改造して使うか、自作してみる必要がある。また、特殊な工具を用いず、カッターやナイフで革をまっすぐ切断する職人もいと聞いた。そこで、丸い歯の特殊なカッターを購入して試してみたが、素人がきれいに仕上げることは困難であった。いずれにせよ、作業に適した工具と、熟練した技術が必要であると考えられる。今後の課題としたい。

4 研究の効果（得られた結果など）

(1) 伝統と現在を洗い直す

現在の祭り囃子が抱える諸課題（伝承に適した笛の調達、笛奏者の定着と人員増、演奏技術の向上など）を、日本音楽研究の観点から点検し直すこと（他地域の事例を比較等）により、伝承者と地域の支援者、研究者の連携によって解決する糸口を切り開いた。

(2) 大学が地域から学ぶ、大学の力が地域の新たな伝統を育む

(ア) 専門分野の異なる研究協力者とともに、囃子の調査とサポート（稽古や本番への参加など）を推進することにより、地域の歴史や文化を学びながら、地域と大学との関わりあいを深めることができた。

(写真 20：2019年5月12日、崇仁船鉦・曳山の巡行において、崇仁お囃子会リーダーの指示を受け、本学の研究協力者1名が、一時的に船鉦にのぼって音頭を取る役目をつとめた。地域以外の者が鉦にのぼったのは、史上初のことでないだろうか。大学と地域との、たび重なる交流による象徴的なできごとであった。)



(イ) 崇仁祭囃子の伝承者（小学生、青年層、中高年層）、研究協力者、学生が、一つの場で祭囃子の稽古に参加し、技術上のさまざまな課題を一緒に乗り越えようとした。祭り囃子という芸能を軸にして、地域と大学が連携するイメージを具体化することができた。また、今後の研究の下地となる大きな効果として、かつて行われていたものの現在は行われていない伝承（曲目、奏法、楽器）を、大学との共同作業で復活していきたい、演奏の技術を往時のように高めたい、といった地域の伝承者の声を、じかに聞くことができた。また、過去の映像や録音等の伝承資料、それらに参加していた伝承者の存在も判明した。次年度以降の研究課題の中では、このような伝承者の声と存在、伝承資料にも着目し、まずは情報と資料の整理に取り組んでいきたい。

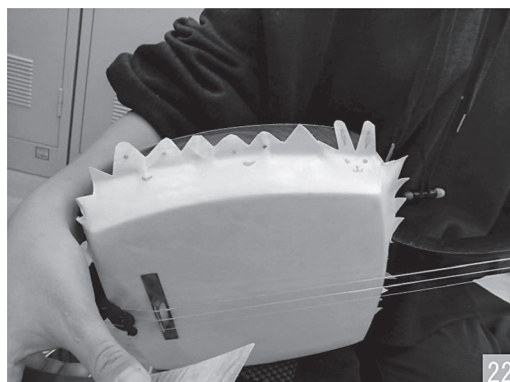
(ウ) 5月祭礼の巡行では、数年前より本学の学生がリーダーやフルートで伝統的な囃子に加わるという楽しい先例があったが、今後、本研究によって製作した笛や伝承の基本を学んだ新たな演奏者が巡行に加わることであれば、囃子の伝承形態の基本を育みながら非伝統的なものも交りながら祭礼を盛り立てるといふ、伝統の新局面を展開することが可能となる。そのための基盤作りを進めることができた。(写真 21：2019年5月12日、崇仁船鉦・曳山の巡行の出発)



直前。笛を練習する美術学部学生有志、研究協力者、研究代表者。)

(3) 産学連携的な取り組みへの視座

プロダクトデザイン専攻の研究者、地域の伝統的産業との連携によって構想する新しい三味線のコンセプトを視野に入れ、移転後の崇仁キャンパスを崇仁ブランド・芸大デザインの三味線開発の拠点とし、学外提携ラボに工房を設置するといった産学連携的な事業への展開について、また、学生が授業やクラブ活動でそのような楽器を活用して楽しむ未来像について、いくつかの手作業を軸にして、将来に向けた意見交換を行うことができた。(写真 22: 12月12日、第3回革張り実験の成果。革の端の処置方法は検討中であるため、敢えて楽しんでみた。このような偶然性によって生じた遊びや意匠が、新しいデザインの製品を生み出すヒントにつながるかもしれない。)



(4) 教育研究の基盤づくりと次世代への継承

(ア) 研究代表者が担当する授業(本学音楽研究科日本音楽研究専攻「日本伝統音楽基礎演習」「音楽学特殊研究」、音楽学部「音楽学特講」)の一部の時間を、本研究の進度にあわせて活用し、通常の座学とは異なる実験的作業を、多くの学生に体験してもらうことができた。とくに、実際にやってみて失敗した経験、思うようにできなかったことは、学生にとっても研究代表者にとっても、多くの学びと発見につながった。

(イ) 崇仁の祭礼および囃子の歴史的研究については、近い将来、若手研究者(本学大学院日本音楽研究専攻の院生等)が本格的に取り組み論文としてまとめることが期待される。そのための環境と基盤を整える役割を担った。

(5) 計画を変更した点

(ア) 崇仁地域と大学との提携事業を一覧するアーカイブ(webコンテンツ)作成については、随時、事業の情報を収集し、事業への参加を心がけ、アーカイブ作成の方法を検討してフォーマットを試作したが、アーカイブ構築には至らなかった。元崇仁小学校の解体が今年度末に迫る中、事業数が非常に多かったため、全体像の把握が困難であったこと、実務作業が追いつかなかったことが要因である。

(イ) 新たなデザインの楽器(仮称:ネオ三味線)の製作を目指す構想については、共同研究者の博士論文「三味線に関するプロダクトデザインからの考察一人と道具の新たな関係の構築を目指して一」(2018年度、本学美術研究科)のコンセプトを社会的に展開させる方策の一つとして計画したが、構想の前提となる楽器の要所として胴面、つまり革の特性の検証に力を注ぐ必要性を認識したため、デザイン構想よりもまずは革の検証を優先して進めることにした。

5 研究成果の公表方法

(1) 報告書

本年度1年間の研究活動の概要を執筆し、日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』第17号(2020

年6月30日発行)に掲載した。(=本報告書)

(2) 活動記録の発信

研究に関わる考察メモ、進捗状況、広報などを、研究代表者の個人のSNS (Facebook、Twitter) を利用して記述し、本年度内に広く発信した。

(3) 授業・講座・行事・イベント・ワークショップ・演奏会等を活用し、本年度内に様々な公表を行った。それらの委細は、「研究の実施内容・方法」において「◆」印をつけて記録した。研究の途中であっても、その経過を含めて、得られた成果について、考察したことについて、多くの人々に広く知ってもらい、実際に聞いてもらう、見てもらう、体験してもらうことを意識して取り組んだ。